8. 京丹後市久美浜町海士区地名調査

上武　恒介

1．はじめに

本年度のフィールド実習では京丹後市久美浜町海士地区において中原家文書調査、および地名の聞き取り調査をおこなった。本報告はこれらの調査成果をもとにして当該地区の地名を記録するものである。なお、聞き取り調査の実施概要は以下の通りである。

日　時　2024 年（令和６）８月９日（金）15：30-16：20
場　所　海士区公民館
協力者　仲原毅氏（1937 年〈昭和 12〉生）、山本俊幸氏（1947 年〈昭和 22〉生）
調査者　上杉和央（教員）、青野要、上武恒介、山崎敬幸（以上２回生）

2．用水・河川に関わる小字

まずはこの地域の地理的概要を示しておこう（図１）。海士中央部には同市南端の市野々に源を発する川上谷川が北流し、両岸に豊かな沖積平野を形成している。海士の所在する谷一帯ではこの川上谷川が耕地や集落に水を供給してきた。以上を踏まえ生業の基盤をなした用水・河川にかかわる地名を紹介していく。

（1）イネ

海士では 1988 年（昭和 63）の圃場整備により水利施設も改良された。山本氏によれば、現在はパイプラインを通して用水を供給しているが、これ以前は井堰が使用されていたという。

当地では井堰のことをイネといった。イネは特に京都府域でみられる地名であり（松永 2021）、海士では荒井根橋付近の井堰や橋爪いねが使用されていた。また慈観橋付近には油池いね、甲山にはゴミイネというように川上谷川各所に井堰があった。これに関して、1875 年（明治８）に作成された「官有地取調書」（中原家文書 23）は若干の地名を提示してくれている（表１）。イネが付くものには「向山油池いね」「荒いね馬の瀬」「大いね」「あらいね」があったことが確認できる。「大いね」の場所は不明だが、「油池いね」は慈観橋付近、「荒いね」「あらいね」は荒井根橋付近の井堰を指していると考えられる。同年の段階では大規模な耕地整理がまだ実施されていないため、本史料は近世以前の水利体系を示していると思われる。

（2）ナカミゾ（ライハン川）・アワラ川

各イネを通して田地一間一枚に供給された水は、その両岸において１本の用水路に集約され久美浜湾へ流れていくことになる。東側の耕地では中央部の通称ナカミゾという用水路へ排水され、下って甲山では来ハン川と呼称される。また西側においても用水は耕地中央部の室谷川、

通称アワラ川と呼ばれる川に排水される。ただし詳細は次項で後述するが、室谷川は直接油池には流れず、川上谷川へ合流する点が東側と異なる。そしてこれら用水路の支線の維持のため、毎年３月末から４月上旬にかけてミゾホリ（溝浚え）がおこなわれている。

このほか、集落東部のヌレダ（湿田）の谷・宮谷・寺谷・安田の谷からも取水していたが、海士には谷が少なく争いも多かったとのことである。

表１　明治８年「官有地取調書」にみえる小字一覧

字	分類	面積	税金	備考
七谷口	草山	1町1反分	2銭	従前上納
七谷南側	草山	2町5反分	4銭6厘	従前上納
七谷北側	草山	2町8反1畝分	3銭2厘	従前上納
べつそう	草山	6反7畝分	1銭2厘	従前上納
佛ヶ谷	草山	1反5畝分	2銭	従前上納
垣の廻りかけず	堤上草苅場	1町2反6畝分	1銭2厘	今般新規上納
砂子高はし	堤上草苅場	2反2畝20分	2厘	今般新規上納
西わき	堤上草苅場	5畝10分	1厘	今般新規上納
向山油池いね	堤上草苅場	1反9畝分	2厘	今般新規上納
荒いね馬の瀬	井路	1反4畝分	1厘	今般新規上納
垣廻り池の内	井路	1反9畝10分	2厘	今般新規上納
あわら	悪水井路	1反1畝分	1厘	今般新規上納
ぬれだ川	悪水井路	1反10分	1厘	今般新規上納
大いね	井堰2ヶ所	10間	3厘	今般新規上納
あらいね		8間		今般新規上納
合計		反別9町5反20分 間数18間	15銭3厘	

※下線部は本調査で確認できた地名を示す。

（３）セギャア（瀬替）

ふたたび川上谷川左岸、室谷川との合流地点に目を転じるとセギャアという地名がみえる。瀬替とは文字通り瀬を替えるという意味である。山本氏によれば合流地点一帯は洪水が頻発する低地であり、耕作には不向きな土地柄であった。かつて室谷川の堤防は霞堤となっており、大雨の際には水が溢れやすかったためである。

また、両氏によるとこの地をめぐっては油池地区と争いがあった。大雨によって逆流した水が耕地に被害をもたらし、また油池への通行にも支障をきたしていたため、室谷川を油池へ流すよう相談したことがあった。当然油池の受け入れられるところではなく室谷川は現在も川上谷川へ合流しているが、このような村々のやりとりが瀬替という地名の由来になっていると考えられる。

（４）アワラ（海原）

瀬替のすぐ南にはアワラがみえる。漢字では海原と書き、アワラ川のもととなった地名と考えられる。アワラは一般にじめじめした土地、浸水しやすい低湿地を指しており（松永2021）、やはり合流地点一帯が湿地であったことがうかがえる。かつては大雨の対応に苦心したが、圃場整備時の堤防の改修によって洪水はみられなくなったとのことである。

３．隣村甲山村との争論にかかわる地名

近世社会において全国各地で山論・水論が発生していたことは周知の通りであるが、海士村とてその例外ではない。幸い中原家文書には寛政期における甲山村との山論裁許をまとめた史料（同文書 26「山論ニ付御尊判頂戴之次第扣書」）が残っているのだが、ここでは詳細な裁許過程には触れず地名に着目して当時の村の様相や村同士の関係性をみていこう。

（１）シチダニ（七谷）

寛政８年（1796）、海士村と甲山村との間でシチダニ（七谷）の利用をめぐって山論が起こった。甲山村は海士村北部に隣接する地であり、川上谷川最下流という性質上、ジルの田地（湿田）が多かった。かかる地理的要因が以下のような関係性を生み出していく。

当時出石藩領であった海士村は、七谷は天正の頃（1573 ～ 1592 年）より秣場として利用してきたとして、松林・刈畑の開発を続けていた。このため、久美浜代官所領であった甲山村は田地が貧弱な上に土砂が流入し、また肥草などの肥料が不足するようになったと主張する。そこで松林の伐採と刈畑を解消するよう幕府評定所に訴えるという次第である。

改めて表 1 の「官有地取調書」をみると七谷は海士区内の官有地となっており、明治初期には草山として利用されていたことがわかる。近世において田畑が開発されたものの、明治期には再び燃料採取地に戻っていた可能性を指摘できるだろう。

（2）ジャヌケ（蛇抜）

七谷の隣にはジャヌケ（蛇抜）地名がある。蛇抜は一般的に大雨によって山が崩れ、土砂が流出した跡地のことを指す（松永 2021）。実際、本史料には「草刈場四ヶ所有之、今般及出入ニ所々甲山村之儀申立候得共、字北之ほう𠂆字けびゲ谷・ひやうたん谷・蛇抜・貝谷・七口辺迄相手方ニ而数ヶ所切開畑等いたし」とあり、新畑開発によって地盤が緩くなり、土砂が流出するようになったと考えられる。山本氏によれば七谷道という七谷に行くための道も存在しており、村人にとって重要な場所であったと思われるが、現在は荒地化が進んでいるとのことである。

4．おわりに

本稿では聞き取り調査をもとにして用水や争論にかかわる地名を紹介してきたが、これらは一部に過ぎず位置比定できなかった地名もある。なかでも、大月ノ尾は海士の歴史に欠かせない地名といえる。

中世において一帯は海士郷と呼ばれ中原権大夫が海士城を拠点にしていたが、その屋敷は六ノ廻、大月ノ尾と推定されている（京都府熊野郡役所編 1923）。なお傍証は要するが、今回特定できた大月ノ尾付近には現在矢田神社や宝珠寺が所在しており、中世より海士郷の中心地であった可能性を指摘しておきたい。

以上、田畑の統合が進み農業従事者が減少する中で地名は記憶から失われつつあることが明らかとなった。今後も現地調査や関連文書の調査によって地名を記録していく必要があるといえる。

謝辞

今回の調査にあたってご協力いただきました仲原毅氏、山本俊幸氏に心からお礼申し上げます。

参考文献

京都府熊野郡役所（編）1923『京都府熊野郡誌』

国土地理院「国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス」（2024 年 12 月 25 日最終閲覧）

https://maps.gsi.go.jp/#15/35.599357/134.926701/&base=pale&ls=pale&disp=1&vs=c0g1j0h-0k0l0u0t0z0r0s0m0f0

松永美吉 2021『民俗地名語彙事典』筑摩書房

図版・表出典

表１　中原家文書 23「官有地取調書」をもとに筆者作成。

図１　地理院地図をもとに筆者作製。

図１　海士地区周辺の地名

編集後記

余裕をもって仕事に取り組みたい。一つ仕事が終わる度に今度こそはと思うが、今回も果たせなかった。文字通りバタバタ。年末から長い師走が続いている。一つの救いは、春からのフィールドワークに始まり、冬の集報に終わるこの一連の営みが、10号を越え、府大歴史学科の伝統として根付きつつあること。フィールドをご提供いただいた関係各所のご厚意に深く感謝申し上げたい。

なお本書の組版作業は、歴史学科文化遺産学コースの合同実習メニューとして学部生がAdobe社のInDesignを利用しておこなっているが、もちろんそのままでは本にはならない。一書にまとめるにあたって力を尽くしてくれた大学院生の頑張りにも深く感謝したい。（い）

京都府立大学文学部歴史学科
フィールド調査集報　第11号

編集・発行　京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522　京都市左京区下鴨半木町1-5
発　行　日　2025年3月31日
印　　刷　株式会社 北斗プリント社
〒606-8540　京都市左京区下鴨高木町38-2